

パートナーシップシティ

市民とのパートナーシップによるまちづくりを進める「鹿児島市」。
福祉や教育などさまざまな分野にわたる地域課題の解決に向け、行政と協働して取り組む市民活動団体やNPO法人などを紹介します。

Vol.18 ストーリーテリングの会 「おはなしの森」



おはなしが好きな人たちが集まりました

ストーリーテリングとは、道具や身振り手振り、声色などは使わずに、言葉だけでおはなしを届けることで、「素話^{すだ}」とも呼ばれます。

ストーリーテリングの会「おはなしの森」は、おはなしの好きな人が集まって、ストーリーテリングを学び合い、次の世代におはなしの輪を広げようと、平成17（2005）年5月にストーリーテリングの学習会として結成しました。

その後、ストーリーテリングの基礎となる児童文学や絵本、わらべうたの学習会も加わり、現在の会員数は県内外合わせて45人。会員の大半は主婦ですが、中には図書館の司書をしている人もいます。会員は会としての活動のほか、個人でも保育園や幼稚園、小・中学校、図書館、高齢者施設などでボランティアとして

おはなしを届ける活動をしています。

聞き手である子どもたちの心に寄り添うようにおはなしをすると、子どもたちとの距離が近くなるように感じます。最初は下を向いていた子どもが、だんだんとおはなしの世界に引き込まれて、顔を上げて私たちのおはなしをしつかり聞いてくれるようになると、とても嬉しいです。背中を向けている子どもでも、耳を傾けて聞いていることが分かった、「聞く力」を身につけた瞬間を垣間見たようで、それもまた嬉しいものです。

たくさんの言葉を届けたい

同じ内容のおはなしでも、語り手の間の取り方や話し方で、聞き手の思い描く世界が変わります。大切なのは、目には見えないおはなしの世界で、聞き手が何を感じてくれるかだと思います。

また、昔話や物語は、人の心を楽

ませてくれると同時に、おはなしを聞いた人の心に、生きていくためのメッセージや美しい日本語を、知らず知らずのうちに財産として残すものでもあると思います。

私たちは活動の中で、お父さん・お母さんが自分の子どもに絵本やおはなしを通して、たくさんの言葉をお届けしてほしいと伝えています。我が子に自らの声で、心を込めておはなしをすることは、子どもにとって愛された記憶であり、大人になつてからの生きる力となつて、いつまでも心に残るものだと思います。

昔話や物語の中に含まれている、たくさんの美しい日本語を伝えることも、親から子への贈り物になると思います。

次の世代に伝えたいために

今でこそ、読み聞かせやおはなしのボランティアの人たちが増えてき

ましたが、私が子育てをしていた頃は、そのような機会は親子読書会ぐらいしかなく、「子どもが学校を卒業すると、読み聞かせも終わり」という人が多い時代でした。そんな中でも、おはなしを続けていく人がいて、自分の子ども以外にもおはなしを届けていく人がだんだんと増えていきました。

私自身の子どもは、すでに独立していますが、家を離れるとき、よく読み聞かせをしていた絵本や児童書を持っていきました。一緒に読み合った本の中には、その時々思い出がたくさん残っています。そういった思い出の本を身近に置いておきたかったのかもしれない。今でも会話の中に絵本や物語のフレーズが出てくることもあり、親子で笑い合っています。

会員の子どもの中には、おはなしを聞いているうちにストーリーを覚えて覚え、小学生の頃から語り手とし



道具を使わず、お互いに目を合わせるようにしておはなしします



対象者に合わせて絵本を使うこともあり、どんだんおはなしの世界に引き込まれていきます



子ども向けだけでなく、「大人のためのおはなし会」も開催しています

取材メモ

かごしまメルヘン館で行われたおはなし会。おはなしが進むにつれ、前のめりになっていく子どもたちの姿が印象的でした。

取材後、私も久しぶりに思い出の絵本を引っ張り出し、懐かしい気分を味わいました。

問い合わせ ☎265・2019



代表 鳥羽 啓子さん
とば けいこ

ストーリーテリングの会
話をしてくれた人

そのために、私たち自身も楽しみながら学び合つて、目には見えなくても大切なものをこれからも届けていきたい。そう思つて活動しています。

そのために、私たち自身も楽しみながら学び合つて、目には見えなくても大切なものをこれからも届けていきたい。そう思つて活動しています。

そのために、私たち自身も楽しみながら学び合つて、目には見えなくても大切なものをこれからも届けていきたい。そう思つて活動しています。